

保育者養成校における総合表現の意義

—学生はオペレッタから何を学ぶか—

櫻井かおる・松嶋 瞳

The Significance of Comprehensive Expression
In Training-schools for Childcare Workers
—What students Learn from the Staging of an Operetta—

Kaoru Sakurai, Hitomi Matsushima

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

保育者養成校における総合表現の意義

—学生はオペレッタから何を学ぶか—

The Significance of Comprehensive Expression In Training
-schools for Childcare Workers

—What students Learn from the Staging of an Operetta—

櫻井 かおる・松嶋 瞳

Kaoru Sakurai・Hitomi Matsushima

1. はじめに

幼稚園教育要領に領域「表現」は、「感じた事や考えたことを自分なりに表現を通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とある。ねらいは①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。としている。こうしたことを踏まえ本校においては、保育者養成として領域「表現」に関する教育目標を設定している。目標を大きく4項目掲げているが、その一つに「豊かな感性を持ち人間力のある保育者～子どもと共に遊び、その楽しさを感じとれる保育者、自分自身の感性を磨き表現できる保育者」がある。本校においては、この教育目標に沿った教育を行うために1～2年を通して独自の体験的授業を多く導入している。体験的授業の目的は1.「芸術を鑑賞することで美的感覚・色彩感覚を磨き、感動する心・感受性を養う」2.「1で受けた感動を受け止め、心に感じたことを表現する能力を養う。」とし、ミュージカルや演劇鑑賞、影絵や人形劇、音楽鑑賞を行う。音楽の授業では1年次に「ピアノ演奏」の他「リトミック」や「リズム表現Ⅰ・Ⅱ」において基礎的な音楽表現を学ぶ。2年次に総合的な表現として「オペレッタ公演」を行っている。学生は「音楽」「表現」の科目において様々な知識を得るだけでなく自分自身を表現することを求められていく。そして、2年の後期においては、「音楽」と「表現」が結びついたオペレッタにおいて、より具体的、実践的、創造的な表現を学ぶこととなる。

本研究においては、1年次での音楽表現科目において、学生の能力向上を確認する。そして、2年次の授業において、実際に学生がオペレッタによってどのように変容し、何を学んだのかを考察する。そこから総合表現にオペレッタを取り入れていることの意義と成果を確認する。さらには、このことが保育者養成校における「表現」授業の在り方について明確化していくこととなる、と考え研究を行うこととした。

2. 先行研究の概要

本研究の先行研究について、国立情報研究所の国内刊行雑誌情報データベース Cinii で検索を行った。その結果、キーワードを「オペレッタ」「表現」「保育者養成」「音楽表現」で検索し 5 論文を抽出、文献レビューを行った。5 論文の概要を整理する。

武岡 (2014) によると保育者養成におけるオペレッタの意義を学生への実態調査から探っている。人前で歌うことが嫌いな学生が多いという結果から、効果的な表現指導を工夫している。「歌に遊びやストーリー性があればイメージが膨らみ自然に楽しく歌えるようになる。」として特に保育者養成における音楽表現指導が効果的である方法の一つとして音楽劇的遊び・オペレッタを挙げている。「学生はオペレッタを経験することにより人前で表現することの苦手を克服し、自信を持てるようになる。練習を積み重ねていく過程において豊かな表現力が培われ保育者として活躍できることに繋がっていく。」¹⁾としている。

桐原 (2011) は「音楽表現指導法」を受講している学生の学びについて検討している。第 1 回目の授業では、保育園でのオペレッタ実践の映像を取りあげている。そして、歌唱練習、手遊び、遊び歌などから身体表現への基礎作りを行っている。さらに身体表現を活用した創作活動を取り入れオペレッタ実践に繋げている。こうした取り組みから学生は、表現に対して「積極的姿勢に変化していった」としている。また、学生は実践の教育現場において、「音楽表現の指導は子どもたちに表現力のみならず、心理的側面への良い影響や身体的発達にも寄与するものであると捉えていることが確認された。」²⁾としている。

宮本 (2007) は表現力の観点から保育者養成校におけるオペレッタ授業の効果を考察している。「オペレッタ」授業受講生の受講後のアンケートから音楽表現、身体表現、造形表現においてスキルの向上が見られ、授業の効果をj確認している。また、オペレッタ授業は、「協調性と団結力を高める格好の活動である。」³⁾と述べている。

小澤 (2008) は、総合的表現活動としてオペレッタを上演し学生の人間的成長につながったことを実践報告している。著者は 3 年間取り組んだオペレッタ上演において「作品選択の重要性や作品を理解することが大切。」としている。「作品からのイメージやメッセージを感受し演じるとで疑似体験する。その中で感性や、想像力がかきたてられ結果的に表現力を豊かにすることができる。」⁴⁾と述べている。

木戸 (2014) は保育学科、音楽ゼミの授業の一環としてオペレッタを中心とした作品の制作・発表を行い学生の表現活動の場としてきた。7 本の作品制作の経緯や発表の様子、結果や課題が報告されている。報告の中で「学生が練習の厳しさを感じながらも集中し歌唱能力を挙げているのが確認されている。」⁵⁾としている。

前述において、オペレッタ、表現、保育者養成に関わる先行研究を①保育者養成校におけるオペレッタの意義、②音楽表現指導法による学生の学び、③学生に対するオペレッタ授業の効果、④総合表

現活動としてのオペレッタ実践報告、⑤音楽ゼミ・オペレッタの活動報告、の5つの領域にわたりレビューした。本研究では、②音楽表現指導法による学生の学びに焦点を当て、1年次音楽授業の確認と2年次の学生へのアンケートから学生がオペレッタによりどのように変容し成長したかを検証し①保育者養成におけるオペレッタの意義を明確にしたいと考えた。

3. カリキュラム及び学生の変容について（アンケート結果より考察）

1) 1年次に行う科目について

(1) 「こどもとリズム表現Ⅰ」および「こどもとリズム表現Ⅱ」

1年次に「こどもとリズム表現Ⅰ」および「こどもとリズム表現Ⅱ」において特に音楽表現に関する内容を学習する。各科目90分を15コマ展開で行い、2年次に向けて音楽を伴う身体活動、歌唱、器楽合奏などの基礎を培う目的でシラバスを設定している。具体的には「こどもとリズム表現Ⅰ」では以下のような流れである。

表-1

回数	履修主題	内容
1-2	音楽の基礎を学ぶ	音価（休符）、楽語、拍子 バイエルを読み解く
3	ボディパーカッションを通してリズムを体感しながら学ぶ	拍子、様々なリズムを体で表現 2グループ以上で異なるリズムの重なりを感じながら演奏する
4-6	楽器について学び、合奏の楽しさを味わう	楽器の基本的な扱いを学ぶ 「It's a small world」を合奏する 「すてきなともだち」を合奏し、歌を合わせる
7-9	歌唱、合唱	腹式呼吸や発声のメカニズムを体感する 指揮法を学び、声を合わせて歌う 保育園で歌われることの多い歌を歌う
10-11	手遊びについて調べ、発表する	グループごとに手遊びについて調べ、発表する （鏡で行い、レクチャーする）
12-13	創作ダンス	「こどもの歌大百科」より1曲選び、歌いながら踊る
14-15	音楽教育の変遷と様々な教育法を知る	保育所保育指針第3章・保育の内容(オ)「表現」の領域における音楽諸活動について。わらべうた、文部省唱歌、童謡の概要を知り、どのように保育の現場に生かしていくか考察する

「こどもとリズム表現Ⅱ」では、上記「こどもとリズム表現Ⅰ」を踏まえ、保育園児を招待して行

うクリスマスコンサートに向けて教員の指導のもと学生自身で器楽合奏、ダンス、合唱などのセッションに分かれて計画立案から発表、振り返りまでを10コマで行う。

(2) 学生の認識と実際

「こどもとリズム表現Ⅰ」(全15回)を終えた段階で学生のアンケートを行った。

(回答数32/受講者数33名)

①「こどもとリズム表現Ⅰ」を受講し身についたことは何ですか？(複数回答可)

- ・音楽理論の知識...19
- ・楽器演奏の技術...14
- ・表現活動に対する意欲...22
- ・歌唱力...5
- ・身体表現の技術...9
- ・身についたことはない...0
- ・意思を伝える力...8

②受講する前後で変化したことは何ですか？(自由記述)／抜粋

- ・人前に立って発表することが楽しくなってきた
- ・歌ったり、踊ったりすることに抵抗がなくなった
- ・リズムに合わせて体を動かすことの楽しさを知った
- ・表情、声のトーン、明るさの印象が大切だと気付いた
- ・音楽が子どもに与える影響について考えるようになった

③あなたにとって苦手だと感じることは何ですか？(複数回答可)

- ・音楽理論...8
- ・楽器演奏...4
- ・大勢の人の前に立つこと...16
- ・歌唱...8
- ・身体表現...10
- ・自分の意思を伝えること...8
- ・グループ活動...5
- ・苦手なことはない...1

④表現活動に関して、さらに学びを深めたいことは何ですか？(自由記述)／抜粋

- ・より多くの歌やリズム遊びを覚えたい
- ・グループ活動をスムーズに行うスキルを身につけたい
- ・年齢別の指導法や計画の立て方、子どもの興味をひく指導法について
- ・創作ダンス、マスゲーム振付のコツ
- ・歌が苦手、子どもの声域に合わせた歌唱法

以上、4項目において学生の回答を眺めると、総じて「表現」することに対し、初めは緊張していた、苦手意識があったが、徐々に慣れて楽しさも味わうようになってきたことが分かる。しかしながら、質問①と②ではある程度の達成感と表現活動の面白さを感じているにも関わらず、質問③と④ではまだ足りない、苦手であると考えている学生が多いのである。とりわけ大勢の人の前に立つことを苦手と感じる学生は半数以上にのぼる。最初は慣れないことに対する恥ずかしさが勝っていたが、専門的な知識を得ることで、より深い世界があるのだと実感し、もっと学びたいという意欲が増した学生にとって、今度は周囲からどう見られているのか、という恐れや不安があると推測される。確かに、技術・技能が伴わない場面もあるが、アンケートからは、今後身につけたい技能として「円滑なグル

ープ活動」「指導計画、指導法」など、より具体的で明確な答えを求めていることもうかがえる。入学してから4カ月という短い期間で、このような観点に行き着くまで成長したのもまた事実であり、音楽分野における表現活動という領域においても学生が個々の能力を伸ばし、保育全体へと目を向ける段階に到達したことは非常に喜ばしいことであった。

(3) 2年次オペレッタ公演に向けて必要とされる技術について

先に述べた保育園児を招待して行うクリスマスコンサートは1年次では器楽合奏、ダンス、合唱などを発表するが、2年次では「オペレッタ」を上演する。「オペレッタ」は音楽表現、身体表現、制作活動など様々な表現の集大成ともいえる活動である。これまで音楽について専門的に学んでこなかった学生が2年間の養成期間を経て、子どもたちへ活動を展開できるようになることは容易ではないが、まずは自分自身がその活動をしっかり体験し、その体験に基づいて知識と技術を広げていくことが望まれる。そのために1年次後半は「こどもとリズム表現Ⅱ」の授業において多くの歌唱、トーンチャイムを含む器楽合奏、そしてグループ活動を取り入れている。前述したアンケートにもあったように学生はある程度の達成感はあるものの、現状に満足せず、まだ人にどう思われるかということ懸念している状態である。このような学生において、まず大切なことは良好な人間関係を構築し、失敗を恐れない雰囲気作りをすることであると考ええる。そのためには、自分がどう見られているかという視点ではなく、自分自身が相手をどう受け入れるかという視点に立って活動を進めていくことが肝要であり、同時に「こどもとリズム表現Ⅰ」で学んだ音楽の諸要素を確実に実践できる歌唱力や器楽演奏能力を身につけていくことが「オペレッタ」上演には必要不可欠である。また、昨今のインターネットなどの普及によりダンスや手遊びなどを容易に真似ることができるが、あえて自分たちで考えて、試行錯誤をする体験を重視し、活発な議論を行うことも期待している。それらを学生たちがしっかりと体験していくことで、「オペレッタ」上演に必要な技術を身につけ、総合的な表現活動に取り組んでいくことが可能であると考えている。

2) 2年次に行う科目について

(1) オペレッタ授業の内容

1年次の「こどもとリズム表現Ⅰ」および「こどもとリズム表現Ⅱ」において基礎的な音楽表現を学び、2年次においては、「オペレッタ」を行う。授業の目的、到達目標として・「音楽や美術など総合的な表現力を養う」「各グループの活動の中から個々のテーマについて保育の現場で展開される表現活動實際を現状分析し表現活動の在り方や意義を理解する」「作品をつくっていく過程の中から協調性を養い、感動体験、達成感を通して保育者として豊かな人間性を培う」としている。年間の指導計画を以下のように定めている。

表-2

週	履修主題	履修内容
1～4	オペレッタについて	・オペレッタの概要 ・保育園 幼稚園のオペレッタ ・台本作成 ・目標「テーマ」設定
5～6	台本読み合わせ	・内容研究 ・発声練習
7～10	荒立ちなど	・舞台表現 ・発声、歌唱練習 ・作曲、編曲 ・衣装、道具類作成計画
11～14	部分稽古	・演技指導 ・器楽アンサンブル ・衣装、道具類作成開始 ・演技、器楽、道具、衣装各班合流
15	中間発表	・各幕毎に各班確認
16	振り返り	・各班手直し
17～19	止め通し稽古	・演技、器楽、道具、衣装合同稽古による流れの確認 ・メイク確認
20～22	通し稽古	・照明計画作成
23～26	衣装、メイク付稽古	・各班手直し、追加など
27	ゲネプロ	・照明チェック、大道具出はけ確認
28	本番	・園児対応、観察
29	振り返り	・グループワーク
30	まとめ	・グループ発表

- ① 第1週目～第6週目においては、オペレッタについての概要を学び、保育園・幼稚園の実践例の紹介や演目についての情報収集を行う。また、全ての授業通して行う発声練習や準備運動等の流れを理解する。
- ② 第7週～第10週目においては、舞台での表現方法や演目内の歌唱指導を行う。また、大道具、小道具、衣装制作の立案をする。劇中使用される音楽の編曲、作曲を開始する。
- ③ 第11週～第14週においては、演技指導、器楽練習、衣装・道具類制作を開始する。

- ④ 第15週～第16週においては、中間発表を行う。大まかな劇の進行と音の入り、衣装のイメージを確認して、作業を進める。
- ⑤ 第17週～第19週においては、各幕の練習を行う、大道具を建て、小道具を使用し、一部の衣装を身に付け、体の動きや舞台上での立ち位置を確認していく。
- ⑥ 第20週～第22週においては、通し稽古を行う。始め2幕単位での練習から開始し、幕間のつながりやその際の大道具の動きを確認していく。スポットライトなどの照明の計画を立てる。
- ⑦ 第23週～第25週においては、各班の手直しとメイクを考える。衣装班と合同で役作りの協力をする。
- ⑧ 第26週～第28週においては、ゲネプロを行い本番に向けての手直しを行う。本番では招待している保育園児の様子を見ながら進行を行う。
- ⑨ 第29週～第30週においては、発表の振り返りを行い次年度に向けての改善点等まとめる。制作物の片づけを行う。

(2) 学生の変容

①の間の学生は教員からの指導を受け入れる姿勢が多く、自ら情報を得ようとしてたりテーマに対しての解釈を深めようとするものがほとんど見られなかった。この段階での学生の感想が下記の通りである

表-3

・自分たちにできるのか不安だ	・やりたくない
・本番は休みたい	・こんな難しい曲弾けるわけがない
・先生が演奏すればいいのでは	・色々難しくてやる気が出ない
・この役はやりたくない	・目の前が真っ暗だ
・つらい	・人前に出るのは苦手
・真剣なひととそうでない人がいて真面目にやるのが帰って恥ずかしい	・お菓子の家を作ってみたかったから嬉しいけれど実際に作るとなるとどうすればいいのかわからない
・正直乗り気です	・あまり深く追求したくない
・わくわくする	・ディズニーを上演したかった
・授業だから仕方がない	・面倒くさい

オペレッタに対して、期待があるという学生もいるが、多くの学生は、マイナスのイメージを持っていた。創り上げていく期待や楽しみは感じていないようであり、具体的に作業を進めていくイメージもつかない状態であった。

②～③においては、徐々に作業が開始したため前向きに取り組む様子が伺えた。ここで困難と感じた

部分は、教員が作成した台本を使用するため教員のイメージする道具、衣装と学生のイメージするものに食い違いが生じたことである。また、演技においては時代背景も考慮して感情移入が必要になり学生にとっては困難とを感じる場面も多かった。

④の段階で学生は能動的な姿勢に変化していった。演技、音楽が合体し背景が出来上がってきたことで急速に意欲が増すと同時に楽しみも感じられる様子であった。制作班での作業の流れや各々の役割が確立した。器楽班は演奏と演技のタイミングを合わせる困難さを感じていたが役者の歌や踊りに音楽が挿入されることで表現の幅が広がる相乗効果を体感していた。

⑤～⑦は、各班の合同が協働の充実感につながった。手の足りない部分への積極的な援助や上演することへの期待感が全体の統一のものとなった。

⑧ゲネプロでは、緊張から思い切った演技ができない学生が多く本番に対して自信を失っている様子もあったが、お互いに励まし合う姿が見られた。本番では今までの努力の成果を存分に発揮することができ満足していた。公演終了後の感想が以下である。

表-4

・思いを込めていいものができた	・みんなの力で作品を創り上げることができた
・たまに出たくないもう嫌だと思ったけれど最高の思い出になった	・時間をかけていくうちにオペレッタがいい作品になっていった
・もう一回公演したい	・鳥肌がたった
・頑張って作ってきた時間は充実していた	・これから先ずっと忘れない
・一体感を感じた	・後半は準備が楽しかった
・協力する楽しさを知った	・この経験を就職してからも活かしたい
・クラスみんなや先生が皆を支えて助け合っでできた劇だった	・子どもたちも一緒に笑顔で踊ってくれて嬉しかった
・本番に近づくにつれてみんなの気持ちややる気が目に見えて変わってきてそれを見て自分も頑張ろうと思った	

4. 研究の成果と今後の課題

本研究においては、保育者養成校である本校の1年次の音楽表現に関する授業の確認を行い、2年次においては、オペレッタによって学生がどのように変容したのかをアンケートから検証した。

1年次においては、学生は、音楽を伴う身体活動、歌唱、器楽合奏を行うことを通し表現活動に対し、楽器の演奏技術が身についたと感じ、表現することに対する意欲や楽しさを感じていることがわかった。半面、人前での発表などにはまだ苦手意識が残っていることやより具体的な指導方法を知りたいという回答も多かった。また、1年次の苦手意識や不安が、「オペレッタ」開始当初のネガティブイメージにつながっているとも考えられるため、学生の欲求を満たし、苦手意識、不安をどのように解消していくかは今後の課題であると確認できた。

2年次においては、学生は「オペレッタ」授業開始当初、イメージできないものへの不安を多く持っており、制作することに意欲を示していなかった。演技や制作に関しても同様であった。それに対し公演終了後は充実感や達成感、喜びがほとんどの感想であった。学生が自分たちの考える方法で舞台に必要とされる物や演技に必要とされる感情を表現したことは、学生自身の創造と実践の結果と考えられる。また、学生が各々の得意な分野で力を発揮することで他の学生からの信頼を得、自尊感情を高めることにも大きく影響を及ぼしたと考えられる。このことから2年間通しての音楽表現に関する授業、「オペレッタ」は総合的な実践として成果を見出し意義があると確認することができた。そして、保育者養成校においては、知識や技能を学ぶだけでなく学生の本来持っている力を引き出すための取り組みの必要性があると考えられた。そのために、「オペレッタ公演」に向けての取り組みは、総合的な授業として大きな役割をはたしていると考えられた。

今後は、台本や音楽、ダンスの創作、演出までを学生たちが全て自らの手で作り上げるための指導が必要と考える。学生が自身の内的感情を表現する技術を身に着け、さらに、保育現場で子どもたちに向けて発信できる段階までの指導を具体的に考え授業に取り入れていきたい。

引用文献

- 1) 武岡真知子：保育者養成における音楽表現“オペレッタの意義”、富山短期大学紀要 第45巻、pp.33-48、2012年
- 2) 桐原礼：幼稚園教諭・保育士養成課程の「音楽表現指導法」における学び、千葉経済大学短期大学部研究紀要 第7号、pp.111-120、2011年
- 3) 宮本智子：保育者養成校におけるオペレッタ授業の効果、国際学院埼玉短期大学研究紀要 第28巻、pp.19-27、2007年
- 4) 小澤和恵：表現力と人間性を高める総合的表現活動の実践・オペレッタ上演から何を学ぶか、埼玉純真短期大学研究論文集1、pp.39-45、2008年
- 5) 木戸純子・大下紋加・安達真理子・田中順子：下関短期大学保育学科音楽ゼミナール活動報告、下関短期大学紀要 第33号、pp.37-52、2014年

参考文献

- 厚生労働省編：保育所保育指針解説書、フレーベル館、2008年
- 花原幹夫：新保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る保育内容表現、北小路書房、2009年
- M.モンテッソーリ：モンテッソーリの教育子どもの発達と可能性、あすなろ書房、1997年
- 時実俊彦：脳を育てる、三笠書房、1989年
- J.H.ペスタロッチ：ペスタロッチの書簡、玉川大学出版部、1983年
- コダーイ芸術研究所：保育園・幼稚園の音楽、明治図書出版株式会社、1980年

花原幹夫：保育内容 表現、(株)北小路書房、2006 年

音楽教育研究協会：幼児の音楽教育、音楽教育研究会、1990 年

奥田恵子：楽しい音楽表現、圭文社、2010 年

H.ガードナー：MI:個性を生かす多重知能の理論、新曜社、2001 年

板野和彦：子どもたちが表現して感じ取るリトミック指導、第8回明星大学保育、教育セミナー報告書

安彦忠彦：現代学校教育大事典、ぎょうせい、2002 年

S.ヘルムス・R.シュナイダー・R.ウェーバー：最新音楽教育事典、大空社、1998 年

林建造：『表現』教育学事典 5、平凡社、1956 年

横須賀薫：『表現と教育』教育学事典 5、平凡社、1956 年

ルソー：エミール、岩波文庫、1962 年